

小学校

光村ポケット 道徳

ピンチを
チャンスに!

道徳授業の 大ピンチ特集

道徳が
ニガテ

教員
2年目

道徳の授業には、

ピンチがいっぱい。

こんなとき、どうする……？



LINE公式アカウント友だち募集中!



授業づくりに役立つ情報を、
いち早くお届けします。



光村図書

【教授用資料】 本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。

授業中の大ピンチ。見方を変えれば、学びを深める大チャンスかもしれません。
ここでは、3人の先生方の実践例を基に、授業を見直すヒントをご紹介します。

ピンチ1 授業開始5分で、「答え」が出ちゃった！



導入の問いに対して、子どもから授業のねらいに対する「答え」のようなものが出たら、私は、むしろ深掘りするチャンスだと捉えています。教材を読んだ後に、「さっきの考えは、この場面でも同じ？」「少し変わったかな？」と問いかけます。すると、子どもの経験と教材の出来事との共通点や相違点を見つめさせることにつながり、最初に出た「答え」を、さらに広げたり深めたりすることができると思います。



中川先生

ピンチ2 沈黙が、続く。



沈黙の時間は、授業者にとってつらいものですね。ただ、実際には、発言しなくても、じっくりと考えている子どももいると思います。発言が全てではないということは、常に意識したいものです。

そのうえで、沈黙が続くときには、問いが難しすぎなかったか、子どもが考えている間、教師がしっかりと待っていたか、安心して話せる空気だったかなど、こちらの関わり方を振り返ることも大切です。



中村先生

ピンチ3 いつものあの子しか、発表してない……。



発言力のある子に頼ること自体は、必ずしも悪いことではないと思います。大切なのは、子どもたちが全体の前で発言できているかではなく、学習内容についてきちんと考えられているかです。そのため私は、ペアトークを多く取り入れ、自分の思いを気軽に表したり、友達の意見を聞いたりできるようにしています。また、相互指名を取り入れることも。そのときは、あまり話していない子から当たるようにします。これらの手立てによって、発言が苦手な子も、勇気を出して話せるようになっていきます。



梅澤先生

お話を
伺った
先生方



杉並区立
桃井第三小学校
うめざわまさき
梅澤正輝先生

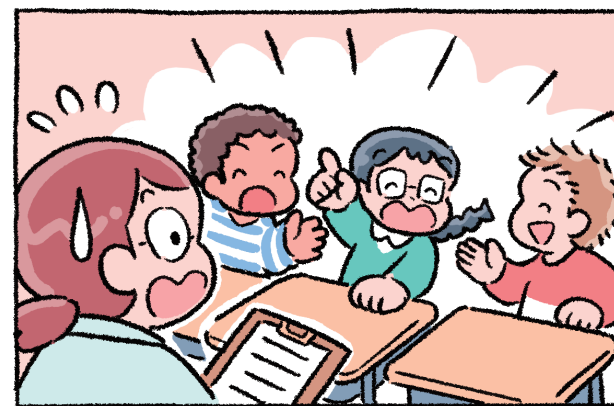


下関市立
安岡小学校
なかがわ みおる
中川 穂先生



大和郡山市立
平和小学校
なかむらゆうき
中村優輝先生

ピンチ4 指導案からずれていく……。



話し合いの中で、ねらいとは別の内容項目に関わる発言が出ることも、よくありますよね。私は、これは、子どもが多面的・多角的に考えられているということだと捉えています。「指導案からずれた」と思って戻そうとするのではなく、その意見をさらに深掘りすることで、案外、授業のねらいとのつながりが見えてくることもあります。指導案も大切ですが、何より、子どもといっしょに考える伴走者でいることを大切にしたいですね。



梅澤先生

ピンチ5 板書がまとまらなくて、パニック……！



板書にはさまざまな工夫が考えられますが、私は、視点ごとに、大まかな板書のパターンを決めています。例えば、Bの視点で考える場合は、登場人物を黒板の中心に描き、その人物の気持ちを吹き出しで、行為を矢印で示すという具合です。心情や関係性を板書に視覚化すると、「この人はどんな気持ちかな？」と、短く問い返せるようになるので、子どもの話を落ち着いてじっくりと聞けるようになります。



中川先生

ピンチ6 「いいこと」や「正しいこと」は言うけれど。



子どもの「本音」を引き出すのは難しいですね。私は普段から、子どもの話で気になったことは、「よくわからなかったから、もっと教えて。」と正直に聞くことを心がけています。そうすると、授業中に、「でもさ、わかっていてもできないことって、ない？」などと私が問い返すと、子どもたちも正直な反応をしてくれることが増えていきます。

このような日頃の対話の積み重ねが、生き生きとした道徳授業につながっていきます。



中村先生

先生方の**大ピンチ**体験

ここまで悩み相談に乗ってくださった先生方にも、実際に体験されたピンチを伺ってみました。

研究授業で、時間切れ——。



梅澤先生

若い頃の研究授業で、登場人物の気持ちについて場面ごとに細かく発問しながら進めたところ、時間内に終わらずとても困ったことがあります。子どもたちは発言しますが、教師との一問一答。今思えば、教材提示後に「どこが気になった?」「なぜ、こんなことが起きた?」など、大きく問いかけていれば、子どもたちの考えをもっと引き出せたかもしれません。発問は、多ければよいわけではありません。子どもの感想から問いをつくり、反応を見ながらいっしょに学ぶ。子どもへの理解を、指導案づくりにも生かしていきたいです。

発問を重ねすぎて全員迷子に。

以前は、「この内容項目なら、この言葉を子どもに言わせたい」という思いが強くありました。想定と違う発言が出ると、何とか軌道修正しようとして問いを重ねる。子どもたちはなんとか答えようとするのですが、問いが複雑になるほど、答えも迷走してしまいます。最後には自分でも何を聞きたいのか分からなくなり、頭が真っ白になってしまったことも。「子どもをレールに乗せようとしすぎず、板書をうまく使って考えを整理し、もっと子どもといっしょに考えたらどう?」。かつての自分に、そう言ってあげたいです。



中川先生

子どもの声が、もっと遠くなった……。



中村先生

こちらが問いかけても、子どもたちからなかなか反応が返ってこないクラスがありました。そんなとき、タブレットを使えば意見がたくさん出るのではと考え、ICT機器を積極的に取り入れたのです。その結果、たしかに画面上には意見が集まりましたが、私と子ども、そして、子どもどうしのやり取りの時間は、かえて少なくなってしまいました。

そんな自分に、今なら「まずはもっと子どもたちに声をかけよう」と伝えたいです。ICT機器は便利ですが、何のために使うのかを考え、あくまでも対話を支える道具として使うことが大切だと感じています。



ピンチはチャンス!
うまくいかないときこそ、
子どもの声をもっとじっくり
聞いてみよう。



光村図書

教授用資料

発行者 吉田直樹
発行所 光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
電話:03-3493-2111(代表)
デザイン ニマユマ
イラスト ホリグチイツ

光村図書ウェブサイト

光村図書 | Q

